

阿嘉島のアミ

村野正昭

東京水産大学教授

大学院の学生時代にアミの研究を始めてから 30 余年、学生時代の生態学的研究から分類、分布の研究に変わっているが、未だにアミから離れられないでいる。

アミの中には、砂の中に潜ったり、サンゴのがれきや岩の穴に潜っていたりするものもあるが、大部分はプランクトンの生活をしている。しかし、普通のプランクトンとは違い、いわゆるプランクトンネットでは採集しにくい仲間である。それは、プランクトンネットは、網を破損したり、砂や泥が混入しないように、海底との接触を避けるようにして曳くが、多くのアミ類は、プランクトンネットの曳網範囲から外れる海底直上や、岩陰などにいるためである。このようなアミを採集するためには、そりをはかせたネットを海底に沿って曳くのがもっとも効果的である。しかし、これは砂や砂泥質の、なだらかな海底に限られ、岩や岩礁が露出していたり、凸凹の激しい海底では不可能である。そのような場所では、それほど深いところでなければ、スキューバダイビングで、手網ですくうのが一番良い方法である。実際、私の所に送られてくるアミの標本の中にはダイビングの際に目視採集したものが少なくない。ただし、アミがある程度の群を作っていないと発見が難しい。

夜間、表層に浮上してくる性質や光に集まる性質を利用して採集することは昔から行われており、効果的である。

大洋を浮遊しているプランクトンは流れのままに彼らの生活域を広げていくからその分布域は世界全域とか、全熱帯域とかに広がる。これに対しアミのような生態を持つものでは、深度とか海底の変化が障害となって分布域を広げることが難しい。このことは、海底の状態が変わると、そこには別の種類のアミがいるということになり、種類数の増加につながって行く。アミ類とよく比較対照されるオキアミ類は前者を代表する動物で、全世界で僅か 86 種程度が存在し、今後も種類数の増加は殆ど見込めないのに対しアミ類では 900 種もが記録され、しかも 1 年に 10 種程度増え続けており、これから先どの程度まで増えるのか見通しが立たない状態である。

日本は、沖縄の亜熱帯域から北海道の寒冷域まで南北に長く、熱帯性、温帯性、寒帯性のアミ約 200 種が報告され、世界でもっとも調査の進んでいる場所である。ちなみにイギリスからは 1955 年に 76 種が報告され、以降、殆ど増加はみられていない。

沖縄のアミについては、残念ながら、まったくといって良いほど、知見に乏しい。この

たび熱帯海洋生態研究振興財団が設立され、その研究施設としての阿嘉島臨海研究所は、沖縄のアミを調べる基地として絶好であり、ここを利用してもらい研究を進めたいと思っている。

財団理事長の保坂さんを始め何人かの方々から頂いたり、阿嘉島臨海研究所での2回の滞在中に採集したりで、これまでに研究所近海から16種1亜種のアミを集めた。そのうち4種は既知の種への同定が不可能であり、これらは新種の可能性が高い。3種は日本を含む西部太平洋からインド洋に広く分布しているものである。5種1亜種はさらに南方のフィリピンやインドネシアとの共通種で、日本からは今まで採集されていないから、日本からの新しい記録と言うことになる。一種は若い個体で確実な同定は出来ないが、オーストラリアで記録された種と極めて似ている。日本内地(現在、日本には内地も外地もないのだが、沖縄の人たちは本州、四国、九州を呼ぶ時に“内地”と言っているので、それを使わせてもらう)との共通種は、残りの3種のみであった。このようにアミの生物相は、日本内地よりは東南アジアのものに似ており、当然のことながら、沖縄は熱帯、亜熱帯の島じまということになる。

前にアミ類の採集方法をいくつか挙げたが、阿嘉島からの16種1亜種がどのような方法で採集をされたかを見るとなかなか面白い結果が出て来る。広域分布型の3種と東南アジア系の5種1亜種は、夜間の表面曳きか灯火採集により得たものである。つまり、昔からの方法で容易に採集できるものは、既にあちら

こちらから出現が記録されているという事になる。新種と思われる4種は *Anisomysis* という一つの属に含まれているが、全てスキューバダイビングで採集したものである。このことは、この仲間は群を作る性質があることを示すとともに、夜になっても海面近くに浮上して来ることもないし、光に集まって来ることもないことを示している。そして、何よりもスキューバダイビングによって初めて我々の前に姿をあらわした動物である。これは特筆されて良いことであろう。

スキューバダイビングは今や研究のためには欠くことの出来ない手段になっている。若者に人気のあるこのマリンスポーツを、ただ単に珍しい景観を楽しむ、きれいな魚と戯れることだけに終わらせることのないようにしたいものだし、そのような普及活動をすることも必要であろう。その意味からも、財団設立の意義は大きいと言わねばならない。

